プラン・ニュース［2021 Spring］NO.116

PLAN NEWS



国際女性デー2021　スペシャル・トーク

「男性学の視点から考えるジェンダー平等」

ベトナム

男の子も変化の担い手に

インド

「暴力の被害にあった女の子を守る」プロジェクト

発行：公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン

国際女性デー2021スペシャル・トーク

男性学の視点から考えるジェンダー平等

プラン・インターナショナルが実施するプロジェクトはすべて、ジェンダー平等の視点を取り入れており、
男の子と男性の参画が不可欠です。
今年の国際女性デーにあわせて開催したオンラインイベントでは、
ジェンダー学を専門とされる多賀太さんをメインスピーカーに、
男性を取り巻く状況と男性にとってのジェンダー平等を語っていただきました。

関西大学文学部教授
一般社団法人ホワイトリボンキャンペーン・ジャパン共同代表
多賀 太さん

聞き手：アドボカシーチーム　長島美紀 職員



マラウィでは「18+プログラム」と名付けて、少女たちを早すぎる結婚から守り、教育を受けるように奨励しています。男の子や男性たちとも協力して、女の子が学校に留まり、早すぎる結婚の防止を訴えています



たがふとし：関西大学文学部教授、一般社団法人ホワイトリボンキャンペーン・ジャパン共同代表。専門は、教育社会学、ジェンダー学。1990年代半ばから男性のあり方を問い直す市民活動に参加し、青年期男性のアイデンティティ形成、ジェンダー平等教育、男性のワークライフバランス、東アジアの男性性などの研究に携わってきた。

男性の傍観者が多いから問題解決が遅れる

――北京で開かれた第4回世界女性会議から約25年。新型コロナウイルス感染症（以下、新型コロナ）の感染拡大により、改善されてきた女の子と女性の状況が大きく後退するのではないかと、懸念されています。新型コロナは男性にどのような影響を与えたといえますか？

多賀太さん（以下、多賀）　国内の状況で考えると、在宅勤務の広がりは、男性が仕事中心の生き方を見直すきっかけとなり、育児・家事への参加が増えたというよい面もありました。一方で、在宅だと暇だと誤解され、いつも以上に家事労働を期待されたりして、家庭内に不和が生じるケースもあったようです。一部では男性のストレスが弱い立場にある女性へむかい、配偶者からの暴力の相談件数が増加したと言われています。多賀さんが共同代表をつとめる「ホワイトリボンキャンペーン・ジャパン」では、どのような活動をされていますか。

多賀　男性が主体となって女性への暴力撲滅に取り組もうと、イベントやシンポジウムを通して啓発運動を行っています。私たちもプランと同様に、男性の意識啓発に力を入れています。周りの人々にフェアな態度で接し、社会にある暴力に沈黙しない「フェアメン」が、私たちの目指す男性の姿です。

立場の弱い男性も〝わきまえている〟

――〝#わきまえない女〟がトレンドワードになるなど、今年は今まで以上にジェンダー問題への関心が高まりました。また、声を上げる男性も増えてきたように思います。

多賀　男性優位な社会ですが、すべての男性が支配者なわけではありません。一部の権力者により、若い男性や立場の弱い男性もまたわきまえさせられ、物を言えずにきました。女性と違うのは、男性はわきまえていれば上にあがれるという点です。男性にも望みがあったことですが、それでも苦しんでいる男性も多い。そのなかで、多くの男性も女性と一緒にジェンダー不平等な社会に異議を唱え、声をあげることが重要だと思ったのではないでしょうか。

――〝女性らしさ〟に苦しむ人が多いように、〝男性らしさ〟に悩む人も多いとお考えですか？

多賀　「家族を養え」といった男らしさを押し付けられ、育児や私生活の時間が取れない。女性以上に競争に駆り立てられるものの、多くは競争に勝てず、負けたら男らしさを達成できていないとされ、弱音を吐いても男らしくないと言われる。上下関係のない人間関係を構築するのが苦手で、孤立や孤独を抱える人も少なくない。コロナ禍で女性の自殺者が増えたことは大変深刻ですが、総数でみると、今でも男性の自殺者数の方が多いのも事実です。

――ジェンダー平等を推進すれば、そういった男性の生きづらさも改善されていくと思いますか？

多賀　これまでのジェンダー不平等な社会が、男性に多くのプレッシャーを与え続けてきたことは間違いありません。ジェンダー平等は必ずしも男性から利益を奪うものではなく、男性に多様な人生とより人間らしい生活を保障するものでもあります。男性にとっても、ジェンダー問題は他人ごとではなく自分ごとです。できることから取り組んでみてはいかがでしょうか？

男性学とは？

社会的に作られた性であるジェンダーの視点から、男性を批判的に捉え直す学問。男性の特権性や女性への暴力・差別、男性内の不平等、男らしさに伴う代償など、多様な視点から男性を研究する。

男の子や男性が主体的に関わるために

――プランでは、活動国において、男らしさを問い直し、見つめ直し、ジェンダー平等に取り組む男の子たちを「Agent of change」（変革をする人）と呼び育成しています。また、男の子が、ジェンダー平等の理解をすすめ、女の子や女性への偏見をなくすための「チャンピオン・オブ・チェンジ」プログラムを実施しています。多賀さんが共同代表をつとめる「ホワイトリボンキャンペーン・ジャパン」では、どのような活動をされていますか。

多賀　まず、全ての男性が当事者意識を持つことが大切です。加害者でない男性が代わりに謝る必要はありませんが、暴力を止めるために何かをする責任は負っているのではないでしょうか。男性の傍観者が多いから問題解決が遅れている側面はあると思います。また、自分が暴力を受けていないか、敏感になることも重要です。たとえば、飲み会などで、上司に服を脱ぐ芸を強制されるのは〝男同士の悪ふざけ〟で済まされがちですが、これは明らかな性暴力です。





ウガンダで実施した「女の子のための安全な都市」プログラムは、何百人もの男の子や男性と協力して実施されました。参加した男の子たちは有害なジェンダー規範について研修を受けたり、危険な場所の調査をしたりしました。また、交通機関の職員に“Girls' safety is my safety”などのメッセージ入り反射ジャケットを支給する啓発キャンペーンを行いました。その結果、コミュニティの治安が改善されただけでなく女の子を守る必要性についての意識が高まり、ハラスメントが顕著に減ったという声も聞かれました

多賀さんからのアドバイス！

ジェンダーに基づく暴力をなくすために男性ができること

1：ジェンダーに基づく暴力について学び、周りに伝える
2：自分の人権が、暴力によって侵害されていないか敏感になる
3：決して暴力を振るわない
4：被害者を守り支える
5：被害者支援や予防啓発の基盤を支える

男の子も変化の担い手に！ 世界中に広がる「チャンピオン・オブ・チェンジ」

ジェンダー平等をすすめるうえで、男の子や男性の参加は不可欠です。プラン・インターナショナルは、14歳～18歳（以下、ユース）の男の子がジェンダー平等の理解をすすめ、推進に携わることを主目的とした「チャンピオン・オブ・チェンジ（変化の担い手）」というプログラムを開発。2014年から、エルサルバドル、グアテマラ、ドミニカ共和国、ホンジュラス、ドイツの5カ国で試験的に実施しました。

プログラムのねらいは、若い男の子たちにジェンダー平等の大切さを伝え、変化の担い手になってもらうことです。家族やコミュニティで当たり前とされていた男女の役割や立場について議論し、これまでの自分を振り返ったり、「ジェンダーとは何か」、「ジェンダー平等」などさまざまなテーマについて考え、学びを深めたりします。

その結果、男の子による女の子への差別的な態度が改善するという成果がみられたほか、ジェンダー平等にむけて、男女ともに政府に働きかけるなどの成果も出ています。その後、女の子も対象にした活動も取り入れ、ユース男女が変化の担い手となってジェンダー平等を促進する活動として、これまでにアジア・アフリカ・中南米などの40カ国で実施されています。ここではベトナムでの活動事例をご紹介します。



男の子むけ
「チャンピオン・オブ・チェンジ」
プログラムのマニュアル

テーマの一例



- 男の子に生まれて一番よかったことは何か？ なぜ？
- 女の子より男の子のほうがよいか？ なぜ？
- 学校や近所にいる女の子や若い女性についてどう思っている？ 彼女たちは男の子と同じくらい賢く、価値のある存在だと思う？
- 家族に女性がいたらどのように接している？ 男性の家族との違いはある？

GENDER EQUALITY ISSUES IN VIETNAM

ベトナムのジェンダー課題とは？

近年経済成長が著しいベトナムにおいても、ジェンダー平等は重要な課題です。たとえば、ベトナムでは男児の赤ちゃんを求める傾向が強く、胎児が女児だと中絶をしてしまうケースがいまだにあります。地域によっては息子を持つことは死後の世界で幸福になるために不可欠という考えや、娘はいずれ結婚して他の世帯に移るため、家族の経済的負担になるという考えが残っているためです。

ベトナムでは共稼ぎが一般的ですが、農村部を中心に家父長制的な思想が根付いており、女性は家の外で稼ぎを得て、家事労働も引き受け、さらに子どもを産み育てるという、二重、三重のジェンダー役割を担っています。また、既婚女性には、男児が生まれるまで出産を続けなければならないというプレッシャーがあることも見受けられます。


養豚で収入を得ながら3人の子どもを育てる女性

解決策 01 男の子もジェンダー問題の当事者に

SOLUTIONS

男児優先という社会的規範を変えていこうと、ベトナムのプランでは、2016年に「チャンピオン・オブ・チェンジ」のプログラムを実施するクラブを設立しました。現在では、プラン・スポンサーシップのすべての活動地域のほか、首都ハノイでも活動しており、99の学校に370のクラブがあり、1万386人のユース（そのうち5,500人が女の子）が参加しています。

クラブは毎月会合を開き、ジェンダー平等、ジェンダーに基づく暴力、性と生殖に関する健康と権利のほか、仲間や親、教師など大人とのコミュニケーションの取り方についてなど、自分たちでテーマを決めて話し合っています。


ハノイの学校でジェンダー平等ワークショップに参加するメンバー。最初は消極的だった男の子もクラブに参加すると、女の子の権利やジェンダー平等に対して積極的に活動する姿がみられます

解決策 02 ジェンダー平等にむけて政府に働きかける

2020年12月、チャンピオン・オブ・チェンジのメンバーたちは、クアンチー省で行われた、国会議員や政府関係者との意見交換会に出席。そこでは学校での暴力やインターネット上の問題（オンライン・ハラスメントや誹謗中傷）のほか、少数民族の子どものための文化保護と教育などが、話し合われました。参加した国会議員は、「子どもたちの声を聞き、直面している課題をよく理解できた。同時に子どもたちが自分たちの権利を確認する重要な機会となった」とコメントしました。意見交換会の後には、公式の書簡を提出し、提起した問題について対処するように求めました。



国会議員のほか、クアンチー省の行政担当なども参加


意見交換会には100名以上が参加


男女問わず積極的に発言・質問し、活発に意見交換しました

VOICES

プログラム・マネジャー　レ・クイン・ラン職員



女の子のエンパワーメント（※）はジェンダー平等を達成するために不可欠ですが、同時に男の子たちの積極的な参加が必須です。これまでに「チャンピオン・オブ・チェンジ」クラブでは、何千人もの男の子たちが参加し、女の子と対等な関係性を保ち、暴力や権力を使わない男の子のあり方について、仲間やコミュニティに伝えるリーダーとなっています。男の子・男性のあり方を再定義することは、男の子たちの生きづらさを解消するなど、彼らにとってもメリットがあります。

※女性が人生におけるあらゆる選択肢を自分の意思で選びとり生きていくために必要な力、男性と対等に家庭内や社会の意思決定に参画する力をつけること

チャンピオン・オブ・チェンジクラブに参加している男の子

私たちは毎月のミーティングで、ジェンダー規範、ジェンダー平等、女の子の安全、学校や地域社会で「変化の担い手」になるにはどうしたらよいかについて学び、話し合っています。女性が家事や育児の全ての責任を負うべきではないし、男の子が人前で泣いたっていいということなどを学びました。

インド

暴力の被害にあった女の子が自分で望んだ人生を歩めるように



ジェンダーに基づく暴力をなくすため、啓発活動を行っている19歳のユースたち

レイプ、性的虐待、ドメスティック・バイオレンス（DV）……。
世界中で、女性の3人に1人が身体的暴力を経験しています。※
プラン・インターナショナルが2020年7月からインドのムンバイで開始した
「暴力の被害にあった女の子を守る」プロジェクトと、今後の展開についてご紹介します。

※ UNWOMEN Facts and figures: Ending violence against women（2021 年 1 月 31 日確認）



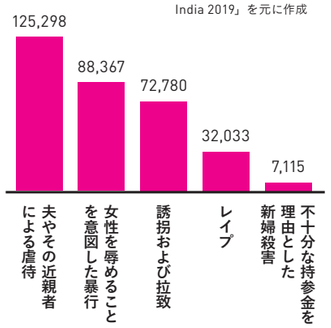
○＝本プロジェクトを実施するムンバイ。首都デリーに次ぐインド第2の都市で国内経済の中心都市ですが、スラム街も多く、1,200万人を超えるムンバイの人口のうち500万人以上がスラム地区に居住しています



ムンバイなど大都市の性産業で働かされ、虐待を受けてきた女の子たちが救出後に生活する家

女性に対する暴力事件（件数）※

※インド内務省「Crime in India 2019」を元に作成



年間40万件を超える女性に対する暴力

２０１８年、トムソン・ロイター財団が世界の女性問題専門家５４８人を対象に実施した「女性にもっとも危険な国」の調査で、アフガニスタンやシリアといった紛争国を上回り1位に選出されたのはインドでした。[1] その理由は、６つの評価項目のうち「女性差別的な文化」「性的暴力」「人身取引」の３つの分野において、世界でもっとも危険であるとされたためです。２０１９年にインドで通報された女性に対する暴力事件は40万件以上に上りますが、そのうち本プロジェクトを実施するムンバイ市のあるマハラシュートラ州は、全国で3番目に多い3万７１４４件でした。[2]

しかし、これらの数字は氷山の一角にすぎません。インド政府の調査によると、身体的もしくは性的暴力を受けた女性のうち、77％の女性は自分の身に起きたことを誰にも打ち明けなかったといいます。[3] その理由として、次のようなことが挙げられます。

- 被害を受けた女性たちが不当な差別やさらなる暴力を受ける
- 警察や病院で人権を軽視した扱いを受ける
- 知識不足や経済的困窮から、司法制度にアクセスできない
- たとえ訴えても、捜査から裁判までの過程に欠陥が多く、有罪率が低い

被害にあった女の子が直面するさまざまな困難

- 心理的・社会的ダメージ
- 被害届の提出と、公になることによる周りからのバッシング
- 法的措置を進めるための医学的診断
- メディアへの対応
- 事件の捜査・裁判のための難しい手続き

インドのプラン・インターナショナル作成資料より

1 Thomson Reuters Foundation The world's most dangerous countries for women 2018 （2021 年 2 月 3 日確認） 2 Ministry of Home Affairs Crime in India 2019 p. 195, 25 September 2020 3 Ministry of Health and Family Welfare National Family Health Survey 2015-2016 p. 572

さらに、暴力によるストレスを抱えながら被害届を提出したにもかかわらず、そのせいでコミュニティのなかで孤立したり、殺害されたりする事件が起きるなど、状況は深刻です。裁判にいたるまでにもさまざまな手続きや対応が必要となり、それらを包括的に支援する体制が早急に求められています。

被害者支援サービスの改善に向けて

本プロジェクトでは、暴力の被害を受けた女の子や女性を支援する制度を改善するため、関係する行政機関とともに取り組んでいます。対象地域では新型コロナウイルス感染症の影響も大きく、活動は慎重にすすめざるをえませんが、約3年半をかけて次の活動を実施します。

1. 司法機関や警察関係者の能力強化支援
- 法律サービス庁内に被害者支援部門の設置：２カ所
- 専門家（検察官、医師、警察、裁判官）への能力強化トレーニングの実施：３３０人

2. 心理カウンセリング実施
- カウンセラーの育成：30人
- 心理カウンセリングの実施と被害者補償のサポート：年間５００件

3. コミュニティや学校における、ジェンダーに基づく暴力についての意識啓発・予防キャンペーン：約20万人

法律サービス庁内に設置する被害者支援部門は、２０２１年６月頃から本格的に稼働する見込みです。暴力の被害を受けた女の子や女性が適切な支援を受け、心身の健康を回復して社会に復帰するため、また、法のもとでの正義を実現するため、活動をすすめていきます。



スラムにある家の前で洗濯をする女の子

「弁護士になって、傷ついた女の子の味方に」



スラムの一角に、両親と5人のきょうだいとともに暮らすシルパ（左）

17歳のシルパ（仮名）は、学校に通いながらプランの活動に参加しています。「この国で、女の子として生きることは大変です。外では、どこに行っても男の子や男性から嫌がらせを受け、警察も助けてくれません。女の子は文句を言わず、ただひたすら耐えるべきだと思われています」シルパは、声に怒りをにじませます。「女の子だから諦めるべきなんて、そんなのは間違っています」

シルパの周りでは、たくさんの女の子が学校を辞めていきました。外を歩くことが危険なため、心配した親が娘を退学させたからです。インドではたとえ結婚しても、安全な生活が待っているわけではありません。シルパの20歳の姉は、夫から毎日受ける暴力に耐えかねて、実家に戻ってきました。シルパは言います。「私は弁護士を目指しています。姉のように社会から見捨てられ、傷ついた女の子たちを代弁し、この間違った社会を変えていきたいのです」

現地スタッフからのメッセージ

トゥシャール・アンチャル職員
（子どもの保護専門 アドバイザー）



住民集会でジェンダーに基づく暴力について語るトゥシャール職員（左端）

日本の皆さま、こんにちは。このプロジェクトに関心をお寄せいただき、ありがとうございます。私はプランで働く前、子どもの保護施設で働いていました。そこには暴力の被害を受けた女の子が多く、信じられないような経験をしてきた子どもの話をたくさん聞きました。その時から、どうやったらこの子どもたちを支援できるか考え続け、10年以上にわたって子どもの保護に携わってきました。このプロジェクトでは、暴力の被害者を支援する制度を改善し、被害者の新たな生活を支援します。プロジェクト終了時には大きな変化をもたらせるよう努力しますので、ご支援をよろしくお願いいたします。

「ガールズ・プロジェクト」のご支援をお願いします

●司法と心のケアの両面からサポート

「暴力の被害にあった女の子を守る」プロジェクト

ご寄付や活動詳細についてはウェブサイトをご覧ください

illustration by Noriyuki Goto

ニジェール

栄養不良の子どもの食料支援
ザリカが願う「健康に暮らせる世界」

西アフリカのニジェールは、国土の約4分の3が砂漠で、干ばつや大規模洪水のためしばしば食料不足に見舞われています。
2018年7月から実施している「栄養不良の子どもの食料支援」プロジェクトでは、こうした課題を解決するため活動してきました。
プロジェクトを通じて、どのような変化が起きているかをご紹介します。





ニジェールに暮らすザリカは13歳の女の子。父親は数年前に亡くなり、市場で働く母親が家族を養ってきました。しかし生活は苦しく、ザリカは弟たちのために食べられる草を集めたり、家畜に与えるトウモロコシなどのカスを集めたりして食料にしていましたが、十分に栄養がとれない状態が続いていました。



プラン・インターナショナルのプロジェクトがザリカの住むコミュニティで始まったとき、ザリカの家族は、特に厳しい状況に置かれている世帯として選定されました。4歳の双子の弟たちは栄養不良と診断され、保健所で薬の処方などの適切な治療を受けました。

また、プランからオスとメスのヤギが支給されると、そのミルクが家族の大切な栄養源となりました。

ザリカは自分の子どものように2匹のヤギをかわいがり、大切に育てました。



ザリカの母親は家庭菜園の作り方を習い、プランからオクラなどの野菜の種子や苗、それに農作業に必要な農具をもらいました。

「お母さんが家庭菜園を始めてから、いろいろな野菜を食べられるようになりました。家の近くで収穫してすぐ調理ができるので、いつでも食べることができてうれしい」とザリカは言います。



やっと十分に食事ができるようになったザリカでしたが、新型コロナウイルスの感染拡大で学校は休校となり、母親も市場へ働きに行けなくなりました。

ザリカは自宅で勉強を続けながら、母親の家庭菜園を手伝ったり、ヤギの世話をしたりして過ごしました。野菜を収穫して弟たちにいろいろな野菜を食べさせられることに、ザリカは喜びを感じていました。そのうちヤギが子どもを産み、それを売ったお金で必要なものを買うこともできました。



その後学校は再開されましたが、いつまた感染が拡大するか、またはほかの感染症や災害が襲ってくるかわかりません。それでも自分たちで食料を自給できるようになったことで、ザリカは少し安心して過ごせています。

「この病気が一日でも早く世界からなくなり、みんなが健康で過ごせるようになることを、神様にお祈りしています」

子どもたちの健やかな成長を支えていきます



解説：プログラム部　海藤純子職員

本プロジェクトでは、皆さまから多くのご支援をいただき、これまで多岐にわたる活動を行うことができました。心よりお礼申し上げます。野菜の種子や苗、ヤギなどを支給したことで、子どもたちの家庭での食事が改善され、以前よりも栄養が摂れるようになりました。保健所で使う治療薬などの支援も、栄養不良の子どもの治療に役立っています。ほかにも、住民のなかから選ばれたコミュニティ・ボランティアが、栄養と保健のトレーニングを受けて活動するなど、自分たち自身で問題を解決していくための土台作りが進んでいます。子どもたちの栄養不良の問題は、短期間ではなかなか解決することができません。さまざまな角度から、時間をかけて、取り組んでいく必要があります。ニジェールでも新型コロナウイルスの感染拡大や、自然災害発生のリスクがありますが、これからも子どもたちの健やかな成長を支えるために、地域とともに活動していきます。

「グローバル・プロジェクト」のご支援をお願いします

●気候変動が脅かす小さな命
「栄養不良の子どもの食料支援」プロジェクト

ご寄付や活動詳細については
ウェブサイトをご覧ください



ARTIDA OUD
ディレクター兼デザイナー
安部真理子さん

途上国の女性も輝ける社会に ジュエリー売り上げの一部で支援

天然石やパール、地金などを用いて、熟練の職人技を活かしたオリジナルジュエリーを販売するARTIDA OUD。ブランド立ち上げ当初から、さまざまな形でプラン・インターナショナルへの寄付を続けてくださっている同ブランドに、支援に込める思いをうかがいました。





「I am」Donation Projectのブレスレット。さまざまなデザインがあり、インドの女性が制作しています。

すべての女性が自分らしく輝けるように

ARTIDA OUD（アルティーダ ウード）は、自社のオンラインショップでの販売を主とするジュエリーブランドです。衣食住のライフスタイルブランドを運営する企業・サザビーリーグのブランドの一つとして、2018年に立ち上げました。

ブランドコンセプトである「raw beauty」は、ありのままの姿が放つきらめき、内面から湧き出る真の美しさを意味しています。すべての女性が自分らしく美しく輝けるように願いを込め、デザインしています。

プラン・インターナショナルのことは、インドの女の子の「早すぎる結婚」のポスターを見て知りました。「女の子だから」のコピーが強く心に残り、「虐げられてきた女の子への支援が、世界を前に進める近道」といった活動方針に共感し、最初から支援を決めていました。

当初から行っているドネーションプログラムでは、お客様が付与されたポイントを寄付に充てる「ポイント募金」のほか、〝「I am」Donation Project〟と銘打ったチャリティブレスレットや国際ガールズ・デーに合わせてデザインしたシリーズの売り上げの一部が支援につながっています。これまでにいただいた寄付は、インドでプランが取り組んでいる「暴力の被害にあった女の子を守る」プロジェクトと、「インドに学校を建てるプロジェクト」などに活用されています（2021年2月時点）。

社会問題に目をむける一助になることを願って

小中学生の頃、旅行先の中東で小さな子どもたちが物売りをしているところに遭遇し、ショックを覚えました。それがきっかけで貧困や児童労働問題に関心をもつようになり、学生時代には南インドの貧困地域の小中学校で勉強を教えるボランティアに参加しました。社会に出てからも、商品作りを通じて途上国の女性が手に職をつけ、収入を得る仕組みを作りたいという思いをもち続けていました。

インドでは通常、ジュエリー職人は男性です。女性の雇用を生み出すため、当初から女性に作ってもらう約束をしていたのに、いつの間にか男性が作っていたことがありました。指摘しても「男性職人が作るほうが早く納品できるのに、何が問題なの？」といった対応。それでは意味がないことを繰り返し説明し、女性が作業する専用の工房を作ってもらいました。また、ブレスレットの一部商品は女性を雇用する現地のNGOに委託し、雇用の創出につなげています。

これからも女性が収入を得られるよう支援を続けていきますが、子どもたちが将来の選択肢を広げるためには教育が必要です。だからこそ、それを実現するために、「インドに学校を建てるプロジェクト」をプランにお願いしたのです。

天然石の採掘場では、子どもたちを工員として働かせている国や地域もあります。信頼のおけるバイヤーさんから素材を購入することで、児童労働につながる素材は購入しないといったことも心がけています。

こうした取り組みに、多くのお客様が賛同してくださっています。SNSも使った参加型プロジェクトでは、商品購入が支援にもなるといった喜びの声や応援メッセージを寄せてくださる方も多く、制作への励みにしています。私たちは直接的な社会問題解決の取り組みはできませんが、アクションを起こすことはできます。より多くの人々が社会問題に興味を持ち、行動を起こすきっかけの一助になればと願っています。

● お問い合わせ先：寄付受付・企業連携担当　Mail：hello@plan-international.jp

大切なご遺産や相続財産を、子どもたちの未来を応援する力に

プランへのご支援方法のひとつとして、遺言によって財産を特定の団体などへ分け与える遺贈寄付や、相続財産を受け取られた方が、故人の遺志を汲んで、あるいは相続人のご意思により行う相続財産からのご寄付があります。
近年、終活や遺贈寄付に関心をおもちになる方が増えています。
今回は実際に遺贈寄付を決め、遺言書を作成された方にお話をうかがいました。





Q 遺贈寄付をしようとお考えになったのは、どんな理由からですか？

過去15年間、スポンサーシップでネパールやインドネシアなどのチャイルドと交流を続けてきました。お手紙のやりとりのほか、実際に何度かチャイルドに会いに行ったりして、楽しみながらプランを通じた支援をしてきました。

私たち夫婦には子どもがいなかったこともあり、途上国の子どもをいつまでも応援し続けたい、との思いから遺贈寄付を決め、遺言書を作成しました。

いまは遺すお金の使い道が決まってほっとしています。

Q 遺贈寄付先はどのようにして選ばれたのでしょうか？

いくつかの団体に資料請求したり、担当者からお話を聞いたりして、比較検討しました。また、親戚に相談したり公証役場を訪ねたりして、第三者の意見も参考にしました。

最終的にプランに決めたのは、長年プランを通じていろいろな支援をしてきましたので、信用できる団体と感じていたことです。担当者ともたくさんコミュニケーションをとって、納得した上で決定しました。

Q 遺贈寄付を検討されている方へ、メッセージをお願いします。

ご家族が賛成してくれるなら、遺す財産を貧しい国の子どもたちに役立ててもらうことは、素晴らしい選択肢だと思います。教育は何より大切です。教育の機会に恵まれない子どもがまだ大勢いますから。



遺贈寄付担当
金子由美子職員

プランの遺贈寄付・相続財産からの寄付には、いくつかの特長があります。遺贈寄付というと、大口の寄付というイメージをおもちの方が多いようですが、おいくらからでもお受けしています。また、現金以外に、不動産や有価証券の遺贈寄付や、財産配分の割合のみを指定して遺贈する包括遺贈もお受けしています。

最近では、生前スポンサーとしてご支援くださった方から包括遺贈をいただきました。ご生前に親しかった方から、障がいがあってもお仕事や旅行など、おひとりで充実した人生を送られていたと伺いました。慎ましく生活され遺された大切な財産を託してくださったことを知り、身の引き締まる思いがしました。

なお、使途について、地域（アジア・アフリカ・中南米など）や、分野（教育・保健・女の子支援など）に関するご意向をお持ちの場合は、その点を考慮し活動に役立てさせていただきます。



お気軽にお問い合わせください

● 遺贈寄付に関する資料をご希望の方はお気軽にお問い合わせください。
Mail: izou@plan-international.jp

国内支援

日本の女の子たちを対象にした支援活動が始まりました



「わたカフェ」には相談室のほか、お茶を飲みながら読書や勉強、会話ができるスペースも

プラン・インターナショナルは、これまで途上国の子ども・若者への支援を通じ、「女の子の権利と尊厳を守る」活動に力を注いでまいりましたが、貧困や虐待、性被害、望まない妊娠といった途上国で多く起きている問題が、日本の女の子たちの身にも起きていることを踏まえ、パイロット事業としての支援活動を開始しました。

数年前から、日本での女の子が直面する問題について調査をすすめた結果、18歳以上の青年期の女の子に支援の手が届いていないという課題がみえてきました。そこで2019年末に内閣府からの認定を取得し、信頼できる専門家や経験豊かなパートナー団体と連携しながら「女の子のための居場所・相談」プロジェクトを立ち上げました。

2020年6月には、新型コロナウイルスの感染拡大により、経済的な問題やジェンダーに基づく暴力などの悩みを抱える女の子たちのために「女の子のためのチャット相談」を開始。2021年2月末までに400件を超える相談が寄せられ、社会福祉士、心理士、助産師などの有資格者が相談に対応しています。

また、2020年8月に女の子のための安全な居場所「わたカフェ」を東京都内で開設しました。気軽に足を運んでもらい、安心して過ごすなかで、専門家が心理面・生活面・就業面などの問題や、性と生殖などに関する相談を受け、支援につなげる場を目指しています。



国内支援事業グループ
福田 愛 職員

「わたカフェ」では、女の子たちの不安に寄り添い、大人を頼れるようになってほしいと願っています。ここに来る女の子たちが次の世代に支援の輪をつなげてくれたらという希望も込めて、活動を広げていきます

ユース
グループ

オンライン・ハラスメント対策を求め ユースグループが内閣府へ提言



オンラインで内閣府へ提言。ユースグループには高校生から社会人が所属し、ユースの意見が反映される社会の実現を求めて活動しています

アドボカシーチームは、ジェンダー課題に取り組むため、プラン・ユースグループと協働して提言活動を続けています。

2020年の国際ガールズ・デーには「若年女性へのオンライン・ハラスメント※」に関する調査結果を公表し、51％の女性が、周りの女の子や若い女性が「オンライン・ハラスメントをとても頻繁にあるいは頻繁に受けている」と回答したことを明らかにしました。

2020年10月にはSNS企業と、オンライン・ハラスメントのないSNSプラットフォームへむけて意見交換を行ったほか、2021年1月には調査結果をまとめた報告書を作成し、政府としての対策を求めて内閣府男女共同参画局へ提言しました。

※オンライン上の誹謗中傷、嫌がらせなど

アドボカシー

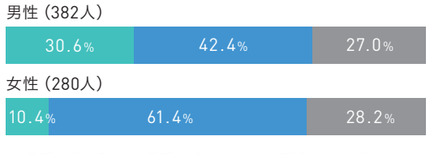
調査から見える教育への期待 ――日本における女性のリーダーシップ 2021

日本における女性のリーダーシップについて、2,000名の男女を対象に、オンラインアンケートとインタビューを実施。

調査結果から、リーダーになると残業など長時間労働になることを懸念する女性が多いことや、女性が「感情的」で「リーダーにむいていない」とする考えが根強いことがみえてきました。同時に、ジェンダー平等とリーダーシップに関する教育の両方を受けることで、女性がリーダーとして仕事をしたいという意欲につながることがわかりました。

プランでは引き続き、日本において女性のリーダーシップを高めるためには何が必要なのかを調査し、提言活動を続けていきます。

Q.あなたはリーダーなど職場で責任ある仕事を行うことを希望していますか？



（プラン・インターナショナルが行ったアンケート調査「日本における女性のリーダーシップ 2021」より）



スポンサーの小室雅代さん。「パワーがみなぎるから」と、昇格試験など、勝負のときにはプランのTシャツをインナーに着てくださっているそうです

＼遠い国の女の子の親になりました！／

知恵と知力は男女平等、18歳まで見守り続けます

プラン・スポンサーシップをスタートしたばかりのスポンサーの方へのインタビュー。
短期間に女の子2人の支援を決めた小室さんに、きっかけや理由をうかがいました。

スポンサー　小室（おむろ）雅代さん
チャイルド　プラティマさん（5歳）　プラティクシャさん（3歳）／ネパール

チャイルドとの交流で支援の実感が湧きます

2019年から、ネパールに住むプラティマさん（5歳）と交流しています。

長年、他の複数の団体へ寄付していたのですが、御礼の手紙や報告書はいただくものの、一方通行の支援といった感覚が否めませんでした。

そんなとき、漫画家のやくみつるさんがテレビ番組で「海外の女の子を支援している」とお話されているのを観て、「そんな団体があるのね」と興味を持ちました。その後、街中で偶然受け取ったのが、やくさんがお話されていたプラン・インターナショナルのチラシ。「これはご縁かもしれない」と支援を決めました。

紹介されたプラティマさんのプロフィールを見たところ、妹がいることが記されていました。仕事がステップアップした時期でもあったので、昨年から妹のプラティクシャさん（3歳）とも交流を始めました。

女の子の教育を応援したかったんです

チャイルドに女の子を希望したのは、私が生まれ育った時代や地域性が影響しています。

何をやるのも男の子が先、女の子は期待されない、男性優位が当たり前の地域でした。教師の父でさえ、戦争経験者ということもあって「力が正義」の考え方、「女の子はどんなに頑張っても男の子の半分くらいしか力がない」と言っていました。

それに違和感を抱いていた私は、「力では負けても、知恵と知力があれば」と勉強に精を出し、進学で都市に出たところ、そこには男女がフラットな関係で学べる環境がありました。

大学を卒業してからも勉強を続けたからこそ希望の仕事を得てきた自負があるので、「女の子が諦めずに頑張れるよう、サポートしたい」という思いが強くありました。

これまでに3通の手紙を送りました。日本の印刷物は紙質がよく写真が綺麗なので、富士山や自宅近くの観光地の写真が載ったチラシやパンフレットを切り抜いて厚紙に貼って作ったカードに、日本や住んでいる地域のことを書きました。

二人ともまだ字が書けないので、返事はボランティアさんが代筆したものを受け取っています。プラティマさんは初等教育に通い始めたようなので、彼女が書いた手紙が来る日を心待ちにしています。

彼女たちが18歳になるまで支援できる自分であるためにしっかり働こう！と、支援が生活の励みにもなっています。今はコロナで手紙のやりとりができないので、プランのインスタグラムやメールマガジンで情報を得ていますが、世の中が落ち着いたら、会いに行きたいですね。





チャイルドのプラティマさん。左が支援開始時の写真。上が「一年の歩み」に掲載されている写真。現在は通学に30分弱ほどかかる地元の学校で初等教育を受け始めています。体育が好きな女の子です。

小室さんのこれまでの交流記録

- 2019年 3月：プラティマさんへの支援開始
- 5月：小室さんから自作カードのお手紙を送る
- 9月：プラティマさんからはじめてのお手紙が届く
- 11月：小室さんから自作カードのお手紙を送る
- 2020年 1月：プラティクシャさんの支援を開始
- 2月：プラティマさんからお手紙が届く。「あなたからのレターを気に入っている」とボランティアさんの代筆にあった
- 4月：小室さんからプラティクシャさんへお手紙を送る
- 7月：プラティマさんの「1年の歩み」が届く。写真から「顔がしっかりしてきた」と成長が感じられた
- 12月：小室さんからオンライン手紙フォームでお手紙を送る。家族の写真を添付した

「東京マラソン2021チャリティ」は今秋開催予定です！


2018大会のプラン・チャリティランナー

今年の「東京マラソン2021チャリティ」は10月17日（日）に開催される予定です。ご寄付いただいた皆さま、ありがとうございました。

中止となった2020大会のプラン・チャリティランナーの皆さまは、この大会か2022大会のどちらかで、「世界の女の子に、生きる力を！教育や自立を支援して早すぎる結婚にNOを！」の想いを胸に、待ちに待った出走を果たします。ウェブサイトでも情報をお知らせしていきますので、引き続きご注目ください！

プラン・インターナショナルは
東京マラソン2021チャリティ事業の
寄付先団体です
東京マラソン2021チャリティ
公式ウェブサイト
https://www.marathon.tokyo/charity/

よくある質問コーナー

ご支援者の皆さまから寄せられるご質問についてお答えします。

Q.マイ・プラン・ページに
**　ログインできません。**
A.いくつかの原因が考えられます。
マイ・プラン・ページのアカウントを
取得済ですか？
アカウントをお持ちでない方で、ご利用を希望される方は、プランのウェブサイトにある「アカウント申し込み」からお申込みください
A.パスワードは設定済ですか？
申し込み手続き後、プランから届くメールにしたがってパスワードを設定いただかないと、アカウント仮発行のままとなりログインできません。メールが見当たらない場合は、下記お問い合わせ先にご連絡いただくか、再度「アカウント申し込み」よりお申し込みください。

【お問い合わせ】
TEL：03-5481-6100
（平日9：00～17：30）
E-mail：service@plan-international.jp

アカウント申し込みはこちら

Q.パスワードが分からない
A.「パスワード再発行」からパスワードを再発行してください。
パスワードは事務局に登録されているメールアドレスに送信されます。登録しているメールアドレスがご不明の場合は、左記までご連絡ください。

パスワード再発行はこちら

あなたも参加しませんか？

プラン支援者の会からイベント開催のお知らせ

「プラン支援者の会」は、全国各地の支援者の皆さまが任意で活動を行っています。「ほかの支援者のみなさんと話がしたい」「志を同じくする方々と楽しく活動がしたい」とお考えの方、お近くのプラン支援者の会に参加してみませんか？

Wウェブサイト fフェイスブック　左記アイコンのある会については、以下のプラン・インターナショナルウェブサイトから、各会のページにリンクできます
https://www.plan-international.jp/supporter/plankai

多摩SP会 f

映画観賞会「ポバティー・インク～あなたの寄付の不都合な真実～」
■ 日時：4月24日(土)　9時30分～11時30分(9時受付開始)
■ 会場：立川市子ども未来センター　立川市錦町3-2-26
■ 内容：映画鑑賞後、感想をシェアして意見交換をいたします。
■ 参加費：1人300円　※事前申込不要
■ 連絡先：矢島
Mail：tama-web3@ngo-npo.or

※新型コロナウイルスの感染状況によっては断りなく中止となる場合があります。

新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、これまでのようなイベントの開催が難しくなっています。各支援者の会は、それぞれ工夫してオンライン開催や、ウェブでのイベント参加等をしてきましたが、今後の開催について、支援者の皆さまからのアイディアやご意見、ご感想等をぜひお寄せください。

ご連絡先：プラン・インターナショナル支援者の会担当
Mail：p-kai@plan-international.jp

■ 支援者の会に関するお問い合わせ先：リレーション開発部　Mail: p-kai@plan-international.jp
※「プラン・ニュース」No.117は、2021年7月上旬にお届け予定です。

プラン・スポンサーシップでご支援いただいている皆さまへ

オンラインでのお手紙送信が便利です

新型コロナウイルス感染症等の影響でチャイルドとの交流に制限や遅れが生じておりますが、こうした状況下でも交流しやすくなる方法として、オンラインでのお手紙送信をおすすめしています。今後はさらに多くのスポンサーの皆さまから、オンラインでお手紙を送っていただけるように準備をすすめてまいります。

季節のデザインを選べる手紙送信フォーム

オンライン手紙送信フォームでは、定型文を使ったメッセージ作成ができるほか、スマートフォンやパソコンに保存されている写真もクリック一つで簡単にアップロードできます。今後は、より季節感を感じられる便箋デザインや、時流にあったメッセージ定型文を、毎月1種類ずつ更新していきます。

手紙送信フォームはこちら


4月は「カルガモ」の便せんデザインと、「写真を送ります」のメッセージ定型文が追加されます

オンラインでのお手紙がチャイルドに届くまで

皆さまから寄せられるご質問の一つに、「送信したメッセージや写真は、チャイルドにはどのような形で届けられているのでしょうか？」というものがあります。これまでは、日本事務局を出発したお手紙が現地事務所に到着するまで少なくとも数週間から1.5カ月程度を要していましたが、オンラインでのお手紙は、事務局で受信してから最短1日（英語の場合）で現地事務所への送信が完了します。また、現地事務所でも、受信したお手紙のデーター括登録・照合が可能になり、正確性の向上や効率化につながっています。


オンラインで送信された「お誕生日おめでとう」のレターを受け取ったチャイルドの女の子（タイ）

お手紙がチャイルドに届くまで

❶ご支援者
手紙送信フォームで送信



郵送では約1.5カ月かかっていたものが、約1週間 最短1日に短縮
※英語の場合

❷日本事務局
登録・翻訳を経て現地へデータ送信（日本語のお手紙の場合は、日本語文の下に英訳を添えたものが送信されます）



❸現地事務所
受信した手紙データをダウンロード・印刷（現地語に翻訳）



❹コミュニティ・ボランティア
車やバイク・徒歩などで手紙をチャイルドに配達



❺コミュニティ
チャイルドや家族に手紙が到着



「プラン・ラウンジ」オンライン活動報告会を開催しています

イベント・カレンダーはこちら

プランの活動を知っていただくための「プラン・ラウンジ」は2020年6月以降、オンラインで開催しています。

直近の開催予定は以下の通りです。ウェブサイトからお申込みいただけます。ぜひご参加ください。

●2021年4月17日（土）14：00～15：00
【プラン・ラウンジ４月】オンライン報告会（仮題）「パンデミック発生から1年～ジェンダー平等を後戻りさせない！～」

●2021年5月15日（土）14：00～15：00
【プラン・ラウンジ５月】オンライン報告会（仮題）「ジェンダー平等のための男の子たちの活動 ～プランの活動事例～」

活動に参加する男の子たち

プラン・インターナショナルの活動地域から

プラン・インターナショナルは、ジェンダー差別のない社会づくりを目指して活動しています。
ジェンダーの問題は、国や地域によって異なるため、文化的背景などに十分配慮しながら、誰もが意思決定への参加ができるように働きかけます。また、性別や年齢にとらわれず、「誰にとっても生きやすい社会」をみんなで作り上げるというプロセスを大切にしています。



Burkina Faso

必要な人に生理用ナプキンを

ブルキナファソでは、使い捨ての生理用品を購入する経済的余裕がない人などのために、自分で洗える再利用可能な生理用ナプキンを作るトレーニングを女の子だけでなく男の子も対象に行っています。



Peru

望まない妊娠を防ぐ

ペルーでは、若者の望まない妊娠を減らすために「思春期の妊娠予防プロジェクト」を実施しています。若者たちは望まない性的接触に「No」という権利があることや、妊娠から身を守る方法について学んでいます。



Mali

FGM撲滅のために

マリは、女性性器切除（FGM）を禁止する法律がない国のひとつです。25歳のクーリパリさんは、プランと協力して彼の住むコミュニティでFGMを終わらせるために活動している青年活動家です。



Brazil

性的暴力について学ぶ男の子

ブラジルでは、子どもたちが性的暴力について学ぶ絵本を作成し、配布しています。子どもたちが、自分の身を守る方法と助けを求める方法を学び、幼少期の性的暴力を防ぐことを目的としています。



Uganda

女性に対する暴力撤廃

ウガンダでは、毎年行われているキャンペーン「ジェンダーに基づく暴力撤廃のための16日間の行動」の一環として、若者たちが通りに出て、女児や女性に対する暴力を糾弾するプラカードや横断幕を掲げました。



Philippines

Be a girl Champion

フィリピンでは国際ガールズ・デーを記念して、犯罪の多い通り沿いに、ストリートアートを制作するイベントを実施。12人の若いアーティストたちが「Be a girl Champion」をテーマに作品を作り上げました。

プランのSNSをフォローしてください

プラン・インターナショナルのFacebook、Instagram 、Twitterで活動国の情報や事務局の日々のあれこれを発信中！

※「国際NGOプラン・インターナショナル」で検索してください。



表紙写真ストーリー

女の子も男の子も笑顔で肩を組む楽しそうな写真はタンザニアから。プランは、タンザニアのすべての子どもたちが質の高い基礎教育を受けられるように取り組んでいます。先生たちと保護者が、生徒の欠席を減らすために協力して問題を解決できるようPTAのような組織を設立したり、退学した若者もフォローアップできるメンターシップ・プログラムを実施したりしています。

PLAN NEWS
2021 SPRING NO.116

表紙写真：タンザニア

公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン
〒154-8545 東京都世田谷区三軒茶屋2-11-22 サンタワーズセンタービル10F
TEL：03-5481-6100　FAX：03-5481-6200
www.plan-international.jp

※当面の間、ご連絡はウェブサイトの「お問い合わせ」フォームよりお願いいたします。